



# 地教委からの提言



## 「コミュニティ・スクールの 取り組みを活かした学校 教育と地域社会の未来」

稲美町教育委員会  
教育長 北谷 錦也

### 1 はじめに

稲美町では、「第3次稲美町教育振興基本計画」（令和2年3月）を策定しました。これまでの第2次の成果と課題、改訂された学習指導要領の趣旨を踏まえ、「万葉から令和へ繋ぐいなみ野の未来を創る 人づくり ～生涯にわたる学びを充実し、豊かな心を育む～」という基本理念を掲げ、生涯にわたる学びの充実と豊かな心を育てていくための基本方針と目標を提示しつつ、その実現のための施策を進めています。第3次計画においても、進捗状況について適切・的確に点検評価を行い、その実現を図るとともに新たな課題にも取り組んでいます。

### 2 コミュニティ・スクールの深化・充実

地域全体で子どもと大人が育つコミュニティ・スクール(以下CSという)の推進を核に、子どもたち・若者たちの地域参加・活動を進めています。

当町では平成30年の稲美北中学校を皮切りに、順次導入を進め、今年度は町内すべての小、中学校(小学校5校、中学校2校)にCSを展開しています。これまでの取り組みにより、学校・家庭・地域が同じベクトルで「当事者意識」をもって学校教育に徐々に参画するようになりつつあります。

現在の学習指導要領では、「社会に開かれた教育課程」の実現が大きな柱として位置付けられています。中学校区単位での地域とのつながりの中で行われてきた目標達成、協働の取り組みを手始めに、町全体を地域と見立て、新たな形での連携や協働を実現していく必要があります。稲美町全体で子どもと大人が育つCSの推進を核に、子どもたち・若者たちの地域への参加・活動を進めて、本地域に密着した系統的な教育実践を行うなど、稲美町だからこそできる取り組みをより深化・充実させることにより、今後のCSの取り組みを活かした学校教育と地域社会の未来を考えていきたいと思えます。



地域の方との浴衣の着付け(小学校)

### 3 地域の中の学校教育

先に述べた「社会に開かれた教育課程」の実現が求められる背景には、変化の激しい社会において、困難を乗り越え、未来に向けて進む希望や力を持った子どもたちを育成するねらいがあります。そのためにも、これからの学校には、社会と連携・協働した教育活動を充実さ

せることがますます求められています。

学校教育は、子どもたちが生きる地域社会の一部となっています。つまり、学校は地域社会の縮図であり、教育課程やその成果について、地域社会において知る権利や責任が生じてきます。すなわち、地域の学校教育が地域社会の未来を有しており、そして、CSの取組を含んだ教育活動を通して地域社会に貢献できると考えるからです。

#### 4 学校教育の地域性

学校教育が地域社会とともに歩んでいくことは、地域も、学校も「豊かな未来」を享受できることであり、非常に喜ばしいことです。しかし、ひとたびそれが異なる方向へ向かうとき、あるいは賛否が分かれるとき、地域住民も参加して冷静になって話し合うことが求められます。

学校教育の持つ地域性には、学校教育を地域に開かれた場で話し合うこと、そしてそれを担保するための日頃からのコミュニティの形成、地域の社会性が関係していると考えます。言い換えるならば、学校教育についてオープンに話し合いをすることを指すと同時に、それを共有できる地域文化と考えます。

#### 5 学校教育の2つの面

地域にある学校の教育には、社会性の育成面と学力の育成面という2つの面が存在します。この2つの面に注目しつつ「学校教育の地域性」を視点として、今後の学校教育やCSの課題と可能性について考えます。

##### (1) 社会性の育成面

社会性の育成に関して、子どもを含む地域社会の未来は様々な可能性に対して開かれています。昨今頻繁に取り上げられる「持続可

能な開発目標（SDGs）」は、多様な課題、参加者などを取り込み、世界が協働して解決しようと活動しています。学校教育の教科書を見ても、食糧課題、ジェンダー課題などSDGsに直結する課題が多く記載されています。その解決について教室で取り上げるには、ネットで情報検索、データ収集をすること、また代替案を出したり、議論したりすることが必要です。それらは、定まった方法で解くだけではないという意味で、解決方法、何を課題として取り上げるかも地域性を有しているのではないのでしょうか。これからの学校教育を考えていく上で、学校が所属する地域社会において何を課題として捉えるか、その課題に向き合う過程にも地域性があることを考慮する必要があります。

今後、学校教育の社会性の育成面がより進むとき、地域社会と学校教育の関係、在り方も変わってくると思われます。



地域イベントへのボランティア活動(中学校)

##### (2) 学力の育成面

次に学力の育成面です。学校の教科等の授業において、解が一つに定まらないオープンエンドな課題が取り上げられています。ここでは、子どもは課題解決の過程で出されるさまざまな解法や表現の中に、これまでの教育

活動で育成してきた資質・能力を活用します。それは課題及び解法が持つ学力の多様性と言えます。この多様性は、これまでの地域社会、学校の中で、子どもたちが積み重ねてきた体験や学習から生まれるものであり、こうした多様な解法や表現を教室で取り上げる方法も、日々教室で様々に実践され、洗練されていきます。

## 6 地域社会が学校教育へ参画する意義

社会的な様々な課題の中でも、特に経済的な豊かさと環境的な豊かさなど、異なる立場が多数見られる場合は、冷静な話し合いが不可欠です。地域社会全体の長期的な利益を考えると、学校教職員だけに任せるのではなく、地域住民として学校の教育課程に取り組む新しい形が求められます。そこでは地域社会やそこに繋がる学校教育の課題を議論し、解決へ導くために学校教育の二つの面—社会性の育成面と学力の育成面—を融合した取り組みが必要になります。その地域住民が学校の教育課程に参加したり共同で議論したりするために必要不可欠な能力（論理的に説明する、多様な考えを認める等）を形成することにも学校教育が重要な役割を果たすと考えます。

学校教育において、多様な考えを認めながらも、論理的に説明するには、学力の育成面の課題、例えば、基礎基本である「読むこと・書くこと・計算すること」などに留まらず、取り上げる課題の範囲を広げる必要があります。そのため地域社会において、学校でどのような課題を取り上げるのか、その課題を取り上げることがどのような意味を持つのか、その課題解決は何を意味するのかなど協議検討し、10年後、20年後の地域住民に必要な能

力の育成方法として学校教育において体系化することをCSに期待したいのです。



地域や学校課題を生徒と協議(中学校)

## 7 おわりに

豊かな自然に恵まれ、歴史的遺産や古からの文化を学ぶにつけ、人々の豊かな感性と満ちあふれる生命力に感銘を覚えます。時代は進み、予測不可能なこれからの世界では、少子化を伴う人口減少、技術革新、地域のコミュニティの希薄化等が顕在化し、これらの変化に伴う様々な問いが出されています。こうした世界の中の課題に向けて、学校・家庭・地域・関係機関が一体となって、子どもたちに「生きる力」を育む教育を進めていかなければなりません。

子どもも大人も「いなみ野」に根を張り、不易と流行を見極めながら「豊かな心」を育み、人格の形成に努め、「未来を創る人」として輝いて生きる日々を希求したいものです。町の第6次総合計画の基本目標の一つ「生涯にわたる学びを充実し夢と志を育むまち」を合言葉に、町民一人一人が心豊かに自立し、社会に貢献しながら人生を切り拓き、未来につながっていくことを願っています。